

アリストテレス哲学における〈部分〉と〈全体〉
—— 質料形相論 (hylomorphism) としてのメレオロジー ——

茶谷 直人 (神戸大学)

私の報告は、アリストテレスにおける質料形相論を「部分と全体」という問題枠から概観し、問題の所在とメレオロジカルな意義を析出しようとするものである。

「全体部分関係」という観点から質料形相論を捉えた場合、次の二つ、すなわち 1) 質料形相論は二元論ではない (はずである)、2) 質料形相論は一元論ではない (はずである)、という二つの特徴が考えられる。一方 1) は、部分 (質料・形相) と全体 (結合実体) の不可分離性を意味するものであり、プラトンの二世界論的イデア論に対するアンチテーゼとして質料形相論が提示されたという哲学史的経緯や、アリストテレスが強調する質料と形相の相関性および同一性などから了解される。他方 2) は、まさに結合実体が質料と形相に分節されるという基礎的事実に注目するものであり、部分による全体の説明力を認めるものである。これら二つの特徴は、一方を徹底すれば他方を否定しかねないような一定の緊張関係にあり、どちらを強調するかで解釈の多様性が生まれるような、そうした問題を孕んでいる。

両者のどちらかを強調した場合に浮かびあがる質料形相論を、それぞれ (Caston にやや倣って) 「強い質料形相論」「弱い質料形相論」と呼ぶとすれば、アリストテレスが自身の質料形相論を典型的に適用し、しかもその抱える問題 (「強い質料形相論」か「弱い質料形相論」かという問題) がダイレクトに露呈される場面として、『デ・アニマ』における心身論を挙げることができる。そこでは魂を形相、身体を質料、個体としての生物を結合実体とする図式が提示されるが、部分 (魂・身体) と全体 (結合実体) との関係性をめぐっては、魂心の同一性、心的事象における心的側面と身体的側面の不可分性を強調することで「強い質料形相論」をそこに見出しうる一方で、全体からの部分の一定の分離可能性を認めるような「弱い質料形相論」を見ることもできる。本報告では、こうした、質料形相論が保持する上記の緊張関係が心身論においても温存されたままそこに適用されているありさまを、確認・検討する。さらには、アリストテレスが全体と部分の関係という問題枠において事柄を考察したことの意義についても言及してみたい。